

青雲書房

文学に現われた

女性の生き方

村松定孝 著

青雲書房

文学に現われた
女性 の 生 き 方

定価 400 円

昭和44年7月20日 初版発行

著 者	村 松 定 孝
発 行 者	川 原 昇

発 行 所 青 雲 書 房

東京都文京区大塚 3～20～4

電話 (944) 6002・振替東京 69543

印刷・殖産堂 製本・田沢製本

(分) 1095	(製) 2001	(出) 3955
----------	----------	----------

目

次

尾崎紅葉「金色夜叉」のお宮と

徳富蘆花「不如帰」の浪子……………七

森 鷗外「雁」のお玉と

夏目漱石「三四郎」の美禰子……………一四

徳田秋声「あらくれ」のお島と

石坂洋次郎「若い人」の恵子……………三

菊池 寛「真珠夫人」の瑠璃子と

有島武郎「或る女」の葉子……………元

谷崎潤一郎「痴人の愛」のナオミと

伊藤 整「火の鳥」のエミ子……………七

中河与一「天の夕顔」のあき子と

林芙美子「浮雲」のゆき子……………四四

目 次

太宰 治「斜陽」のかず子と

大岡昇平「武蔵野夫人」の道子……………五〇

* * *

泉 鏡花「歌行燈」のお三重……………七〇

芥川龍之介「藪の中」の真砂……………六〇

佐藤春夫「田園の憂鬱」の妻……………六六

舟橋聖一「木石」の初……………七五

岸田国士「暖流」の啓子……………八二

尾崎一雄「暢気眼鏡」の芳枝……………九〇

丹羽文雄「有情」の丹波夫人……………九六

井上 靖「氷壁」の美那子……………一〇三

永井竜男「冬の日」の登利……………一二〇

梅崎春生「狂い風」の葬儀屋夫人……………二四

三島由起夫「憂国」の麗子……………二三

福永武彦「廢市」の姉妹……………二六

吉行淳之介「闇のなかの祝祭」の奈々子……………二四

三浦朱門「神話」の茂子……………二〇

小島信夫「抱擁家族」の時子……………一八

林 謙一「おはなはん」の母……………一五

丸山健二「夏の流れ」の妻……………一六

* * *

樋口一葉「雪の日」のお珠……………一七

野上弥生子「真知子」の真知子……………一七

網野 菊「焼栗」の母……………一四

岡本かの子「母子叙情」のかの女……………一〇

目 次

大原富枝「木苺のみのる場所」の英子	一六
瀬戸内晴美「夫の骨」の勢津子	二五
河野多恵子「蟹」の悠子	二三
津村節子「玩具」の春子	二八
三浦綾子「氷点」の夏枝	三五
萩原葉子「対岸の人」の菊子	三三
大庭みな子「三匹の蟹」の由梨	三九
* *	
川端康成の女性	二五

あとがき

「金色夜叉」のお宮と「不如帰」の浪子

尾崎紅葉 「金色夜叉」のお宮と

徳富蘆花 「「ほととぎす」不如帰」の浪子

紅葉が想定したもの

「金色夜叉」と「不如帰」のヒロイン——お宮と浪子の姿をおもいうかべつつ、彼女らの創造主である尾崎紅葉と徳富蘆花の創作の意図にも及んでみることにしましょう。

「金色夜叉」といえば、誰しもすぐ熱海の海岸を連想します。熱海の海岸で一高の学生間貫一とお宮とが悲しい別れをするわけですが、あの場面にいたるまでは二人は同じ屋根の下で愉しい許嫁同士の生活を送り、未来は、夫婦となる日を夢みていました。それが、月にむら雲、富山銀行の息子富山唯継（たけつぐ）がカルタ会の席上でお宮の美貌を見染め、どうしても彼女を妻にむかえようとして、お宮の父に結婚を申込み、父は富豪の富山からの縁談とあって、貫一との約束を破るのは可哀そうだと思ひながらも、娘が金持の令夫人になれば万事都合だと考え、一も二もなく承諾してしまいます。これを聞いた貫一の絶望と悲嘆はどうだったか。お宮をうばわれることは、

かれにとって生命を捨てるにもひとしかったのです。その貫一の、悲しみの訴えである、熱海の海岸で、かれの叫ぶ言葉は、あまりにも有名です。

「ああ宮さん、こうして二人がいっしょにいるのも今夜限りだ。一月の十七日、来年の今月今夜は貫一はどこでこの月を見るのだから！ 再来年の今月今夜。……十年後の今月今夜！ 一生を通じて僕は今月今夜を忘れん。いいか、宮さん、来年の今月今夜になったならば、僕の涙で必ず月はくもらして見せるから、月がくもったら宮さん、貫一は、どこかで、お前をうらんで今夜のように泣いていると思ってくれ」

もの狂おしく叫ぶ貫一、この貫一の悲壮な叫びにこたえてお宮は、

「そんな悲しいことをいわずに貫一さん。私も考えたことがあるのだから、それは腹も立とうけれど勘忍して少し辛抱して下さいな。私はおなかの中にいたいことが沢山あるのだけれど、余りいいにくいことばかりだから、口へは出さないけれど、私は貴方のことは忘れはしない。私は決してみすてないわ」

「みすてない？ みすてないものが嫁にゆくか、おのれ姦婦！」

貫一はお宮を足をあげて蹴り、「待って！」と取りすがるのを後に立ち去ります。

この場面は、しばしば舞台上上演されてきましたし、映画にラジオにテレビにも、人々の眼に耳に親しまれて来ていることです。いまここにわざわざ引用せずとも大部分の読者はすでに

御存じのことでしょう。

が、この場面で、お宮のいう「私に考えたことがある」、「みすてないわ」は、果して一時のいい逃れだったのでしょうか。こういう言葉をお宮をして貫一に告げさせた紅葉の意図は奈辺にあったか？ そこにこそ、「金色夜叉」の再検討の課題が残されているのです。

新時代の女性のタイプ

お宮が一言告げたかった言葉——それは、「金色夜叉」執筆なかばにして紅葉が逝去（明治三十六年）したため、永らく謎とされていました。しかし、紅葉の残した「金色夜叉」ノートが発見され、それによると、紅葉は「宮は貫一を捨つる心あらざりし也。宮は富山家に嫁し如何なる手段かをめぐらして、財産をわが有となし、その上にて貫一の妻たらんとしたる也」と述べているのです。だから、本作がもし完成されていたとしたなら、紅葉の意図したお宮の近代的、理知的な性格が示されたはずです。つまり、紅葉はお宮をして、旧来の貞操観念を一步進めて、物質獲得の上で愛人と共にそれを活用しようという合理主義的なタイプを彼女の上に創造しようところみたのです。こうした行動をとるお宮の良否は兎も角として、物質万能化してゆきつつあった明治中期以後の社会をお宮が悲歎のうちに過ごさずに、愛人とひきさかれる自己の運命を逆に活用して、いったん富山に嫁し、金を得た上で離婚し、やがて愛人のもとへ帰って来ようという

のは、すばらしい思いつきです。運命に臆せずに、運命を利用しつつ創意に生きようという強い女性を作者は想像し、これを小説の上で演じさせようとしたのです。これは当時としては画期的な企てであったといえるでしょう。

惜しくも紅葉の他界によって、それは実現をみるにいたらず、未完成の本作は、いたずらにお宮をして両親の欲心の犠牲となり、貫一を捨てた女性のような印象しか世人に与えずに今日に及んでしまっているのです。お宮は富山に嫁して以後、しばしば貫一に手紙を寄こしていますが、貫一はその中味を読まずに、それをずたずたにやぶいてしまします。これも紅葉の巧みさで、ここで文面が読者にわかってしまったのでは、小説の謎がばれてしまうので、最後まで伏せておきやがて二人が晴れて夫婦になる日の輝かしい表情を予定したのでしょう。さぞや作中のお宮も、自己の本心が作者の死で読者に伝わらなかったことを残り惜しく感じているでしょう。あえて、お宮にかわって、ここにその実相を公開する次第です。

なお、この小説の題名「金色夜叉」も、世間はお宮にそむかれて口惜しさのあまり高利貸となつた貫一をあらわしたものの如くに考えているようですが、むしろ金の夜叉化したのはお宮なのです。金を目あての結婚、富山に実意をかくし、よき妻をよそおうのは、たしかに、鬼の仕業です。しかも、それとても、初恋の人への真心に発する策戦だったことを最後にわからせるべく、作者はあえて「金色夜叉」の題名でお宮を象徴させたつもりだったにちがいないのです。

まさしく永遠の妻

さて、「金色夜叉」が明治三十年から三十六年にかけて読売新聞に連載されたのと平行して、徳富芦花の畢生の名作「不如歸」は、三十一年から三十二年にかけ、芦花の兄蘇峰の経営する国民新聞に掲げられ、満天下の涙をそがしめました。

まだうら若い新妻浪子は、陸軍中将片岡毅の長女として生まれ、海軍少尉川島武男と結婚しました。やさしい良人の胸にいだかれ、伊香保の宿に近い野辺でワラビ採りを楽しんだものつかのま、武男はまもなく軍命により遠洋航海の途にのほります。最愛の良人の出発後、浪子は、そのさびしさに加うるに、気むずかしい姑に仕える心労から病いの床につき、肺結核を医師から宣告され、一度ならぬ咯血に逗子で療養生活をおくることになり、やがて航海を終わって、横須賀に在勤することになった武男は、ひまをみては逗子を訪れ、病妻をいたわります。

「あなた」

「何？」

「なおりましょるか」

「え？」

「わたしの病氣」

「何をいうのかい。なおらんでどうする。きつとなおるよ。なおるといふ精神がありさえすれば。なおらんとするのは、浪さんが僕を愛さんからだ。愛するならきつとなおるはずだ」

そのはげましに浪子は、くもる眼に微笑をたたえ、

「なおりますわ。きつとなおります。ああ、人間は何故死ぬのでしょうか。生きたいわ。千年も万年も生きたいわ。死ぬなら二人でねえ、二人で」

「うむ」

こうして若き夫婦は、永遠の誓いを強くかわしあうのでした。

ところが、ここに二人の結婚をよろこばぬ男がいました。かれ千千岩ちぢいわは川島家の親類でしたが、かつて浪子に艶書をよせ、はねつけられた恨みから、浪子が逗子に転地したことを聞きこむと、ひそかに叔母（武男の母）を訪やとない、もし浪子さんの病気が武男君に伝染しては一大事と、暗に離婚をうながし、この策に乗った武男の母は、浪子を実家へ帰してしまします。武男が軍務のひまをみて、逗子に来てみれば、浪子はいません。不審に思い帰宅すると、母から事の次第を聞かされ、烈火の如く憤るのです。ときあたかも日清間の風雲急を告げ、清国との開戦のがれがたく、武男の乗り組んだ連合艦隊松島号は佐世保に集中すべき命を受けていました。捨てばちから砲丸の的になれよと、まっしぐらに艦と共に西に向い、武男は黄海で負傷。佐世保病院での一カ月。或る日、差出人不明の小包がとどけられます。中にネルの単衣、柔かな袴。これこそ浪子

の千行の涙が縫いこまれていることを思い、武男はひとその衣を抱きしめるのでした。

武男の傷は癒えますが、浪子はすでに天国に旅立っていました。浪子の墓標の前に立ち、「浪さん、何故死んだ」と落涙久しくする武男。その時ひとの足音して、ふりかえれば、岳父片岡中将。「武男君、わしもつらかった。浪は死んでも、わしはやっぱりあんたの親爺じゃ。しっかり頼みますぞ。前途遠しじゃ」

と、中将にはげまされ、この人の真情を思えば、なおも武男の両頬は亡き妻の思い出から涙にぬれつくすのです。

武男にとって、浪子は、まさしく永遠の妻だったのです。

基本的人権が云々される今日でも、日本の家族制度の犠牲となっているのは、嫁の座です。嫁は良人の妻たらんとして、姑の憎悪の餌食となり、明るい日とてない毎日を送る、こうした事実が現在においてすら行なわれていればこそ、戦後に、菊田一夫の「君の名は」がラジオの聴取者をして感動せしめたわけで、ましてや、明治期にあって姑の横暴と嫁のなげきは一入だったにちがひなく、さればこそ、浪子への同情は大きかったのです。作者は、そこに着目して、本作のモデル大山元帥の令嬢のたどった運命を小説化し、同時に肺結核をおそれるのあまり、同症患者をして忌わしき存在視する世の通念にも抗議したのでした。

浪子のモデルとなった人も芦花のこの抗議に、さぞや地下に微笑していることでしょう。

森 鷗外 「雁」のお玉と

夏目漱石 「三四郎」の美禰子

ひかげの花のエレジー

明治大正の文壇で、最高の位置を占めるのは、誰が何といおうとも、森鷗外と夏目漱石の二人です。この両文豪の小説の中にえがかれた女性を、比較しながら、ここに明治の女の二つのタイプを皆さまともに考えてみることにしましょう。

まず、そこで、鷗外の「雁」に登場するお玉という女の薄幸な運命について語ることにします。

お玉は子供相手の飴屋をしている年老いた父を安楽にしてやりたいばかりに、末造という高利貸の妾になります。メカケだの二号だのといえ、すぐ商売女を連想したくなりますが、お玉は清純で親孝行の小娘。まだ、つばみのかたい新鮮な可憐な花なのです。そういう幼なさに、かえってたまらない魅力を感じお玉を愛する末造を、作者は相当リアルに描いておりますが、本作